

本田五郎（編）
大目祐介，本田五郎（執筆）

坂の上のラパ肝・胆・膵 [Web 動画付] 腹腔鏡下手術が拓く肝胆膵外科の NEW スタンドード

山本雅一

社会医療法人中山会宇都宮記念病院院長

腹腔鏡下肝胆膵切除術はこの 20 年間に大きく進歩した。当初は肝胆膵外科分野で発展するのか危惧されたが、術後の患者負担の軽減、合併症が少ないことが多くの臨床研究で明らかにされ保険収載された。腹腔鏡による視野も良好で、外科医教育に有効であることも評価されている。さらには最近ロボット手術も導入され新たな時代を迎えつつある。

2010 年に第 4 回肝臓内視鏡外科研究会を主催した。フランスから Brice Gayet 教授をお招きし腹腔鏡下手術の可能性について多くを学び、その発展を確信した。鏡視下手術の良好な視野から繊細な手術が可能となり、出血量は大きく減少した。創部が小さいことから術後の回復が早く、在院日数も減少した。しかし、臓器を直接触れることができないこと、鏡視下における切除臓器の立体的把握の困難さ、鉗子操作の修得に時間がかかること、大量出血時の止血の困難さなどの問題点も指摘された。経験豊富な医師の下である一定

期間のトレーニングが重要であると認識した。

本書は本田五郎教授と大目祐介医師の合作である。雑誌『臨床外科』で好評連載された原稿にさらに手を入れて出版された。改めて本書を見ると随所に本田イズムというべきこだわりが満載で、著者の心意気が感じられる。術中写真・ビデオは鮮明で、解剖図も的確である。「Pitfall」「Knack」が随所に配置され飽きさせず、さまざまなコメントは刺激的で、「coffee brake」でほっとさせられる。

タイトルの『坂の上のラパ肝・胆・膵』であるが、著者に確認すると、駒込病院、新東京病院、東京女子医大病院はいずれも坂を上った高台にあるとの返答であった。大変ユニークな発想である。私はすぐに司馬遼太郎の『坂の上の雲』を連想した。日本が近代国家をめざして格闘した時代を重ね合わせることで、著者らの鏡視下肝胆膵外科手術で格闘してきた歴史やさらなる高みをめざ

す姿勢を感じた。『坂の上のラパ肝・胆・膵』は、現段階においての標準術式になり得るものであるが、坂の上に立つとさらなる坂道が続いていることは間違いない。その次なる坂道の上を若い外科医にはめざしていただきたい。

東京女子医大消化器病センターを創設された中山恒明先生より「全ての手術は誰にでもでき安全で易しくなくてはならない」、さらに「手術に特許はない」と教えられた。恩師の高崎健先生は「手術は単純でスカッと終えることが重要である」と言われていた。現段階での腹腔鏡下肝胆膵外科手術の教科書とも考えられる本書を、現在ラパ肝胆膵手術に携わっている医師、これからラパ肝胆膵外科をめざす医師にぜひ手に取っていただきたいと思っている。

●A4/頁 376/2023 年 07 月

定価：19,800 円

（本体 18,000 円＋税 10%）

[ISBN978-4-260-04984-9]

医学書院 刊